

Title	弘決外典鈔引書考並索引
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1964
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.3 (1964. 3) ,p.299- 328
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本芳夫先生古稀記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000003-0299

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

弘決外典鈔引書考並索引

尾崎康

弘決外典鈔四卷は、正暦二年（九九二）、村上天皇の皇子の具平親王（康保元？寛弘六・九六四？一〇〇九）の撰になる。その自序にいうように、唐の湛然（妙楽大師）の止観輔行伝弘決十巻が、多くの外典を引いて繁碎なために、この外典を抄出し、これにその原書を引いて注したものである。そして、この書は、多武峰の増賀上人に贈られた。

弘決外典鈔の構成は、つぎのごとくである。まず、巻首に、具平親王の「弘決外典鈔序」がある。ついで、隋書経籍志等によるとして、止観輔行伝弘決がおもに引く「周易十巻鄭玄王弼各注」以下五十九部の書目を掲げる。これは「尸子」などに「本朝見在書目録不見」と書いているように、日本国見在書目録をかなり参考にしている。宝永刊本は、これに外典目と題しているのので、ここでもこれにしたがう。さらに、「年代略記」として、天地開闢のはじめから唐にいたる王朝と始祖の名などをあげ、釈靈実の年代暦によつていることを明らかにしている。そして、本文に入り、巻一に止観輔行伝弘決の序の全文とその巻一、二を、巻二に巻三、四を、巻三に巻五、六を、巻四に巻七、十を、それぞれ収めるのである。これら止観輔行伝弘決の巻数は、「第一（第二）」のように、篇数として扱われている。

弘決外典鈔の引書は、索引を一瞥すれば明らかのように、外典目よりはるかに多い。外典目にあつて注に引用しない書も、とくに子部の書が多くて二十数部あるが、その逆に外典目でない引書も、これと史部の書が多く、そのなかで医書がめだつ。このなかに佚書が多く含まれることは、すでに江戸時代後期の漢学者に注目され、楊守敬の日本訪書志にも、兼名苑、韓知十・郭知玄・祝尚丘の字書、周書異記、漢法本内伝、顧愷之の啓蒙記、通玄、賈大隱の老子疏、周弘正の莊子疏、劉炫の孝経述義と、書名をあげて指摘された(卷四)。このほかにも、のちの注に述べるように、年代略記のよつた積靈実の年代曆(略)など、三十余種が数えられるであろう。

この佚文は、大半がきわめてわずかな断片にすぎないが、また、校合可能の箇所についてみると、原文の節略もあるらしいが、のちに述べるように、三巻まで鎌倉時代中期とされる古鈔本により、さらにその一卷は平安時代末期の書写と推定の古鈔本によるもので、その資料的価値についてはあらためて指摘するまでもなく、すでにしばしば利用されていることもある。また、これら佚書のなかには、清代に輯本のつくられたものも少くないが、むしろ弘決外典鈔が用いられてはいない。したがつて、弘決外典鈔は、今後も大いに利用されるべきで、その便宜のために、この索引を掲げるしだいである。そして、これらの諸書について、きわめて簡単な注をつけた。索引では、書名が引用の標記にしたがつて必ずしも正確でなく、巻数、撰者なども明記できなかったからである。

弘決外典鈔の完本は、宝永六年(一七〇九)の多武峰寿命教院の光榮の刊本があるだけであり、さらに、金沢文庫に、弘安七年(一二八四)に称名寺の円種が校合加点了鎌倉時代の写本があつて、これは卷三末以下を欠く。この二本は、対校のうえ、影印刊行されている(徳富蘇峰校・西東書房・昭和三年)ので、この索引もこれを底本とする。

また、三条家旧蔵天理図書館現蔵の五臣注文選卷二十零卷の紙背に、平安時代末期と思われる筆で、弘決外典鈔の

巻一が写されいて、これが、この書の成立にもっとも近いものである。いまみられる弘決外典鈔の諸本は、これですべてであり、これにも影印本がある（東方文化叢書九・東方文化学院・昭和一二年）。

五臣注文選卷二十零卷の紙背本は、一軸、巻一の零巻で、影印本によると、巻首の弘決外典鈔序、外典目、年代略記と、序（止観輔行伝弘決）の全文、それに本文の冒頭の五字と注文約百字を欠いている。書写の時期は、平安中期とされる文選よりもやや遅れ、それは、文選の巻中に二ヶ所欠脱があるのに、その箇所裏にあたる弘決外典鈔の文は一貫していることでも証明されるといわれる。いずれにせよ、弘決外典鈔の成立から、さほど隔たっていないころの書写であろう。訓点が施されている。巻一は、金沢文庫蔵本に二葉の欠脱があり、宝永刊本に注の二ヶ所の脱落があり、また、後二本の文字の異同はむろんあるので、この一軸の存在は貴重である。なお、索引には、技術的な理由から、これを省いた。

金沢文庫蔵本は、三巻、三冊で、巻三末と巻四全巻とを欠く。巻一は現在四十葉で、おそらく第四十、四十一の二葉が欠けているのであろう。巻二は二十四葉、巻三は二十五葉で以下欠、葉数は記されていない。称名寺開山の審海の手沢本といわれ、各冊首葉の「金沢称名寺」の墨印のほか、巻二末に、つぎのような奥書がある。

予感 金沢長老弘法之志／弘安七年六月十五日乗侍／読之余暇交合他本芟除脱／誤之畢於点者散々也明／眼之人誰不傷嗟奈何々々／相似仏子 円種記

円種については、宝永刊本の影印本の巻末の縁起に、徳富蘇峰氏が、円種述の称名寺の鐘銘や、称名寺、鎌倉の極楽寺、成篁堂の所蔵の諸書から、円種の奥書類を集めて、そのすべてを転記し、一部を影印しつつ、円種が、入宋僧であり、弘安七年には四十歳であったことなどを明らかにしている。

宝永刊本は、四卷、二冊、二巻ごとに一冊に合刻されている。巻首に、談峰念誦崛増賀聖像、談峰寿命教院沙門光栄の刻弘決外典鈔序など、巻末に、弘決外典鈔跋などが加えられていて、刻序に宝永丁亥（四年）、跋に己丑（六年）の年記があり、光栄がこの書を身延山で発見したのであるという。金沢文庫蔵本とはかなりの字句の出入があり、影印本の欄外上層に、対校が附されている。訓点も、やはり詳密であるが、おなじではない。

弘決外典鈔引書索引

凡例

- 一、これは、弘決外典鈔引書の索引である。
- 二、排列は、四庫全書の方式によった。ただ、撰者、注者名だけが録されていて、書名を判定できないものは、末尾に集めて、その人名を字画数の順に並べた。
- 三、書名は、原則として本文のそれにしたがった。
- 四、底本は、金沢文庫蔵本と宝永刊本とで、両者の葉数などを並記してある。金沢文庫蔵本には、葉数が記入されていないが、その数えかたは、宝永刊本にならった。
- 五、表記は、まず巻数、篇数（止観輔行伝弘決巻数）を掲げ、ついで金沢文庫蔵本の葉数、表（a）裏（b）、行数を、そして同様に宝永刊本のそれを示している。
- 六、備考欄に、引書の標記の首字を掲げておいた。その二行にわたるものは、二本の標記が異なる場合で、右が金沢文庫蔵本、左が宝永刊本のものである。
- 七、佚存書、およびそれに準ずる書について、末尾に簡単な注記を施した。

金沢文庫蔵本 宝永刊本

巻 篇 葉表裏行 葉表裏行 備考

周易	一(序)	一a五	一a四	易	曰
	二(三)	五b一	三b九	易	曰云
	二(四)	一五a五	三b五	易	云
	三(五)	一六a一	一四b三	周易乾卦	
周易	三(五)	一六a二	三b三	故王弼注云	
周易正義	一(一)	一六a三	一四b一	周易正義云	
	一(一)	二〇a三	一六a八	正義云	
	一(一)	二〇a三	一六a七		

一(一) 三〇a 四 六a 八 " 毛詩

一(二) 三b 六 二〇b 五 正義云 毛詩

二(三) 五a 四 三b 四 正義云 " 毛詩

二(三) 五b 五 四a 五 " " 毛詩

四(〇) 二〇a 三 周易正義云 毛詩

四(〇) 二〇a 五 正義云 毛詩

四(〇) 二〇a 七 " 毛詩

四(〇) 二〇b 二 " 毛詩

尚書 孔安国伝

四(〇) 三b 七 尚書序云

一(序) 一b 七 一b 五 孔安国曰

二(四) 二〇a 六 二b 九 孔安国尚書注云

三(五) 八b 四 七b 九 尚書注云

三(五) 八b 五 八a 一 " 毛詩正義

三(五) 八b 六 八a 一 " 毛詩正義

三(六) 三b 七 三b 一 尚書伝云

尚書 馬氏伝^①

一(二) 二五b 六 三a 六 馬融曰

三(五) 八b 五 七b 九 尚書正義云

尚書大伝

四(〇) 三a 五 " 尚書大伝云

一(二) 三a 三 元a 八 尚書大伝云

一(二) 八a 七 七b 九 毛詩云

一(一) 七a 二 二五a 八 " 毛詩

二(四) 二b 七 二四a 二 " 毛詩

二(四) 二a 一 二五b 七 " 毛詩

一(一) 二a 五 二〇a 九 毛詩伝云

四(八) 九a 二 " 毛詩

一(序) 二b 一 二a 六 " 毛詩

一(一) 八a 七 七b 九 鄭玄云

一(一) 七a 二 二五a 九 " 鄭玄云

一(一) 二b 一 二七b 五 鄭玄注云

二(四) 七a 一 二四a 三 鄭玄云

二(四) 二a 一 二五b 八 " 鄭玄云

三(五) 三b 四 三b 一 " 毛詩正義

四(〇) 三a 七 " 毛詩正義

一(序) 二b 三 二a 八 毛詩正義云

二(四) 二b 四 三b 八 " 毛詩正義

四(八) 四a 三 韓詩外伝云

二(三) 七a 六 五b 二 周官

二(三) 二a 四 九a 三 檢周礼官儀

一(二) 二〇b 七 元a 二 周礼注云

一(二) 三a 一 元a 三 " 周礼注云

二(三) 四b二 三a二
二(三) 四b四 三a四 " "

春秋左氏傳 一(三) 二b六 三a九 左傳云

杜預注 一(二) 二a二 三b四 杜預云

春秋正義 一(二) 二a三 三b五 孔穎達云

春秋元命苞⁽⁵⁾ 三(六) 三a五 二a一 春秋元命苞曰

孝經述義⁽⁶⁾ 二(四) 三b五 六a四 孝經述義云
三(六) 三b六 二a九 孝經述義曰
三(六) 三b六 三b一 " "
三(六) 三b七 三b二 " "
三(六) 三b七 三b二 " "
四(八) 三b六 六b六 " "

經典積文 一(序) 三b二 三a四 陸德明曰
二(三) 七a二 五a六 陸德明曰
二(三) 六b二 " "
四(一〇) 三a三 " "

論語 一(序) 二a二 一b七 論語曰

一(序) 二b五 二b一 " "
一(二) 二b五 六b八 " "

論語 馬融注⁽⁷⁾ 四(八) 三a八 論語曰

論語 鄭玄注⁽⁸⁾ 二(三) 七a五 五b一 馬融曰
三(六) 二a二 六a三 馬融曰

論語 何晏集解 一(序) 二a二 一b七 鄭玄論語注云

論語義疏⁽⁹⁾ 一(二) 三b一 二a八 論語注云
二(四) 三b七 二b二 注云
一(序) 二b五 二b一 皇侃義疏曰
一(一) 八a二 七b二 案皇侃義疏
一(一) 八a二 七b三 案義疏
一(一) 八b三 七b四 案義疏謂
一(二) 二b六 六b九 義疏云

經典積文 三(五) 七b二 七a二 論語義疏云
三(五) 三b七 三b二 皇侃曰
三(六) 二a六 三a一 論語義疏云

爾雅 一(一) 六a一 六a六 爾雅曰
三(五) 二a二 三b四 爾雅云

切韻⁽¹²⁾ 積弘演

一(序)	二a一	一b七	玉篇云
一(序)	三a五	二b九	玉篇曰
一(序)	三a七	三a二	玉篇云
三(五)	二五a二	三三b四	"
一(三)		三三b六	弘演寺積某云
二(三)	五b四	四a三	弘演寺積某云
四(九)		六b二	弘演寺積某云
一(一)	七b四	七a四	孫恂云
一(一)	九a一	八a九	"
一(一)	二a五	二a九	孫恂·(文選本) 孫恂云
一(一)	六a三	六a九	孫恂云
一(一)	六a四	六b一	"
二(四)	三a七	六b五	孫恂云
四(八)		三a二	孫恂云
四(八)		四b九	"
一(序)	二b六	二b二	長孫訥言云
三(五)	九a二	八a五	"
四(八)		三a二	祝尚云
一(一)	九a一	八a九	郭知玄云
一(一)	二a三	二a七	"
一(一)	六b三	二五a二	"
一(一)	六a四	六a九	郭知玄云

唐韻 孫恂

啓蒙注⁽¹³⁾

切韻 韓知十

三(五)	二a七	二a八	郭知玄云
三(五)	九a一	八a五	"
四(八)		四a八	"
四(八)		四b九	"
四(八)		六a三	"
四(八)		二b三	韓知十云
四(八)		六b六	"
三(五)	二a二	九a三	顧愷之啓蒙注云

史記

史記云

切韻長孫訥言

切韻 祝尚丘

郭知玄

一(一)	二b六	二b二	長孫訥言云
三(五)	九a二	八a五	"
四(八)		三a二	祝尚云
一(一)	九a一	八a九	郭知玄云
一(一)	二a三	二a七	"
一(一)	六b三	二五a二	"
一(一)	六a四	六a九	郭知玄云

三(五) 二b四 一〇b四

三(五) 二b五 一〇b六

三(五) 二b六 一〇b七

二(五) 三a一 二a一 又曰(本文)云

三(五) 三a三 二a二 史記云

三(六) 一b五 一七a三

三(六) 一a二 一七a八

三(六) 二b五 一七b五

三(六) 二a五 一三b七

四(七) 三a四

四(九) 一b三

四(〇) 三a七

四(〇) 三b七

四(〇) 三a一

三(五) 二b六 二b六 注云

二(三) 四b五 三a五 史記索隱云

二(三) 二a一 八b九

二(四) 三a五 一b九 索隱云

三(五) 五b五 五a九 史記索隱云

三(五) 二b五 一四a八

一(一) 一a四 一七a九 正義云

一(一) 一a五 一七b一

史記音義¹⁶ 三(六) 三b三 一b三 史記音義云

漢書 一(序) 一a三 一a二 漢書曰

一(序) 一b四 一b一

一(二) 三b四 一b七 案漢書

一(二) 五b七 一b九 漢書藝文志云

二(三) 七a三 五a八

二(四) 四a三 二b六 漢書刑法志云

三(六) 二b六 三a九 漢書郊祀志云

一(序) 一b四 一b二 注曰

一(一) 四b四 四a五 師古漢書注云

一(一) 一b四 一七b七 師古漢書注曰

一(二) 三a五 三b七 顏師古曰

一(二) 二b五 三a五 漢書師古注云

一(二) 三a三 一七a五 注古曰

二(三) 三a一 師古漢書注云

三(五) 六a六 五b九

三(五) 五a一 一b三 顏師古云

一(序) 一b五 一b三 顏師古曰

三(五) 五a三 四b七 漢書音義曰

四(七) 二a五

四(〇) 三a三

四(九) 三a二 如涼漢書音義云

漢書

案漢書

漢書刑法志云

漢書郊祀志云

師古漢書注云

師古漢書注曰

顏師古曰

漢書師古注云

注古曰

顏師古云

顏師古曰

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

漢書

高士伝 四(九) 一九b七 皇甫士安高士伝云

列女伝 一(二) 三b七 三a三 列女伝云

輿地志 三(六) 一七b四 一六a四 輿地志云
坤元録 一(一) 六b七 六a八 坤元録云

一(一) 一〇b六 一〇a一
一(一) 三a二 二a三
二(四) 三a四 一a八

孔子家語 一(一) 七b六 七a七 家語曰
說苑 一(一) 八a五 七b六 說苑云

臣軌注 一(二) 三a七 臣軌注云
一(二) 三a八
一(二) 三a八 同注云
一(二) 三a一
一(二) 三b二
一(二) 三b四
一(二) 三b六

相鶴經 二(三) 三a三 二a二 相鶴經云

大素經 三(六) 三a七 一a九 大素經云
三(六) 三b一 一b一 大素經注云
三(六) 三b三 一b三 大素經云
三(六) 三b五 一b六
三(六) 三b六 一b八
三(六) 三b七 一b九
三(六) 三a四 一a五
三(六) 三a四 一a六
三(六) 三a四 一a四 大素經云
三(六) 三a二 一a二 大素經云
四(九) 一a四 大素經云
四(九) 一a六
四(九) 一a七
四(九) 一a四
四(九) 一a七
四(九) 一a四
四(九) 一a一
四(九) 一a八
四(九) 一a九

三(六) 三a七 一a九
三(六) 三b一 一b一
三(六) 三b三 一b三
三(六) 三b五 一b六
三(六) 三b六 一b八
三(六) 三b七 一b九
三(六) 三a四 一a五
三(六) 三a四 一a六
三(六) 三a四 一a四 大素經云
三(六) 三a二 一a二 大素經云
四(九) 一a四 大素經云
四(九) 一a六
四(九) 一a七
四(九) 一a四
四(九) 一a七
四(九) 一a四
四(九) 一a一
四(九) 一a八
四(九) 一a九

大素經楊上善注

楊上善

明堂經³¹

四(九)	一八九	"
四(九)	一八七	"
三(六)	二〇a四	楊上善大素注云
三(六)	二〇b一	大素注云
三(六)	一六b一	大素注云
四(九)	一七a五	注云
三(六)	二〇a七	楊上善云
三(六)	二〇b三	"
三(六)	二〇b五	"
三(六)	二〇b七	"
三(六)	一九a一	"
三(六)	二a四	"
三(六)	二a四	"
三(六)	二a四	"
三(六)	二a五	楊上善曰
三(六)	二a六	楊上善曰
三(六)	二a三	楊上善云
四(九)	一六b四	楊上善曰
四(九)	一七a一	"
四(九)	一七b二	楊上善云
四(九)	一七b五	"
四(九)	一八a一	"
四(九)	一八a五	"
四(九)	一六b一	楊上善曰
四(九)	一六b三	楊上善云
三(六)	二a六	明堂經云

明堂經注³²

八十一難呂氏注

三(六)	二b五	明堂云
四(九)	一六b一	明堂經云
四(九)	一六b三	明堂云
四(九)	一六b六	"
四(九)	一六b七	"
四(九)	一六b九	"
四(九)	一七a四	"
四(九)	一七a六	"
四(九)	一七a九	"
四(九)	一七b三	"
四(九)	一七b六	"
四(九)	一七b八	"
四(九)	一六b九	"
四(九)	一七b七	注云
四(八)	六a五	八十一難云
四(九)	一六b五	"
四(九)	一六b八	"
四(八)	五b八	呂氏八十一難注云
四(八)	五b九	呂氏云
四(八)	六a二	"
四(八)	六a三	"
四(八)	六a五	呂氏注云
三(一)	三一	

八十二難楊玄操序 四(〇) 三a六 八十一難序云
 八十二難楊玄操注 三(五) 一〇a四 九a六 楊玄操云

三(五) 一〇a五 九a七 "

三(五) 一〇a六 九a八 "

三(六) 一〇b五 三a八 "

四(九) 一b八 "

四(九) 一b六 "

脈經要決⁽³³⁾ 四(八) 六b三 脈經要決云

病源論 四(八) 五b七 病源論云

四(八) 五b九 "

四(八) 六a二 "

四(八) 六a三 "

四(八) 六a四 "

四(八) 六a六 "

四(八) 六b五 "

四(八) 二a八 "

四(九) 一b八 "

四(九) 一b四 "

四(九) 一a一 "

四(九) 二b七 "

本草⁽³⁴⁾ 一(一) 一a三 七a七 本草云

二(四) 三b七 九a三 檢本草

三二二

二(四) 三a一 九a五 本草云

三(六) 三a五 九a七 "

四(九) 一b八 "

四(九) 一a五 "

四(九) 一a六 "

四(九) 一a七 "

四(九) 一a九 "

四(〇) 一b一 "

四(〇) 一b二 "

四(〇) 一b四 "

四(〇) 一b七 "

四(〇) 一b八 "

四(〇) 一a九 "

四(〇) 一a一 "

四(〇) 一a六 "

神農本草陶弘景注 二(四) 三a二 九a六 陶景本草注云

二(四) 三a三 九a七 "

四(九) 一a六 陶景云

四(九) 一a九 陶云

四(九) 一b一 弘景曰

四(〇) 一b五 陶目

新修本草蘇敬注

四(九) 一六 a 五 蘇敬注云

四(九) 一六 a 七 蘇云

四(九) 一六 a 八 "

四(二〇) 一六 a 二 蘇注云

四(二〇) 一六 a 六 "

二(四) 三 b 七 本草注云

四(二〇) 一七 b 二 同注云

四(九) 一五 b 八 本草拾遺云

一(二) 三 a 三 葛氏方云

四(九) 一八 b 四 通玄云

四(二〇) 三 b 四 "

四(九) 一六 a 四 養性要集云

四(九) 一六 a 五 "

四(九) 一六 a 六 "

四(九) 一七 a 二 尹氏黃帝經注曰

周髀

三(五) 一〇 b 五 九 b 七 周髀云

孫氏瑞応図⁽⁴⁰⁾

二(三) 三 a 三 孫氏瑞応図云

三(五) 一四 b 一 三 a 三 "

三(五) 一四 b 四 三 a 七 "

一(一) 一四 a 一 三 b 六 五行大義云

五行大義⁽⁴¹⁾

二(三) 三 b 四 "

二(三) 四 a 六 二 b 七 "

二(三) 四 b 一 二 b 九 "

二(三) 四 b 三 三 a 三 "

三(六) 一六 b 五 一七 b 八 "

三(六) 一六 a 四 二 b 七 "

三(六) 一六 a 五 二 b 八 "

四(七) 一六 a 六 二 b 九 "

一(二) 三 b 三 二九 b 七 高誘呂氏春秋注云

一(二) 三 b 四 二九 b 八 淮南子云

二(三) 四 a 七 二 b 八 淮南子曰

三(六) 一六 a 三 一六 b 二 淮南子云

三(五) 三 a 一 二 b 八 高誘淮南子注云

三(五) 三 a 二 二 b 九 淮南子注云

三(五) 七 b 一 六 b 九 高誘淮南子注云

一(序) 一 a 四 一 a 三 顏子家訓曰

一(二) 三 a 三 三 a 三 白虎通云

二(三) 三 a 四 "

三(六) 一六 b 三 三 a 五 "

四(八) 九 a 三 "

弁正論

二(三) 九a七 七a九 内二喻曰(十喻九箴)

二(三) 二a一 八b八 弁正論云

二(三) 二a三 九a二

二(三) 二b六 九b七

三(五) 一a五 一b六 高僧伝云

四(八) 一a三 一b三

四(二〇) 三a七

一(一) 五b三 五a五 本伝云

一(一) 五b七 五a九

一(一) 六b三

一(一) 六b五 六a五

一(一) 八b二 八a三

一(一) 八b三 八a五

一(三) 三b一 三b六

一(一) 七a五 六b六 吏部尚書唐臨冥報記云

一(一) 二b二 九b六 案靈応伝云

一(一) 三a三 二a四

一(一) 八a五 七b六 兼名苑云

四(七) 二a七 西域記云

一(一) 一b六 七a三 案老子経

二(三) 二b四 二b一 老子経云

子抄⁽⁴²⁾

四(八) 九a七

四(八) 三b九

二(三) 二b六

三(五) 一a五 一a六 子抄云

一(一) 八b四 八a五 御覧云

一(一) 一五b七 一四b一

一(二) 一六b三 一四a一

四(二〇) 一六a六

(智者大師)本伝⁽⁴⁵⁾

一(一) 五b七 五a九

一(一) 六b三

一(一) 六b五 六a五

一(一) 八b二 八a三

一(一) 八b三 八a五

一(三) 三b一 三b六

一(一) 七a五 六b六 吏部尚書唐臨冥報記云

一(一) 二b二 九b六 案靈応伝云

一(一) 三a三 二a四

一(一) 八a五 七b六 兼名苑云

四(七) 二a七 西域記云

一(一) 一b六 七a三 案老子経

二(三) 二b四 二b一 老子経云

修文殿御覧⁽⁴³⁾

一(一) 八b四 八a五 御覧云

一(一) 一五b七 一四b一

一(二) 一六b三 一四a一

四(二〇) 一六a六

二(四) 一七a四 一四a七 世説云

一(二) 一五a一 一三b二 山海経云

二(四) 一七a五 一四a七 博物志云

四(八) 一〇b二

一(一) 四a一 三a八 漢法本内伝云

二(三) 一〇b七 八b七

一(二) 三a五 二a七 二教論云

二(三) 二a四 九a四

一(二) 一五b五 一六b六 古今仏道論衡云

一(二) 一三a五 一七a八

一(二) 三b三 二b九 古今論衡云

三(五) 一六a六 一四b九 古今仏道論衡云

二教論

古今仏道論衡

冥報記⁽⁴⁶⁾
靈応伝⁽⁴⁷⁾

一(一) 三b一 三b六 吏部尚書唐臨冥報記云

一(一) 七a五 六b六 靈応伝云

一(一) 二b二 九b六 案靈応伝云

一(一) 三a三 二a四

一(一) 八a五 七b六 兼名苑云

四(七) 二a七 西域記云

一(一) 一b六 七a三 案老子経

二(三) 二b四 二b一 老子経云

一(一) 一六a六 一四b九 古今仏道論衡云

二(三) 一〇b七 八b七

一(二) 三a五 二a七 二教論云

二(三) 二a四 九a四

一(二) 一五b五 一六b六 古今仏道論衡云

老子 河上公章句

二(三)	一〇b 四	八b 四	老子云
三(五)	一五b 二	一四a 二	老子云
三(五)	一五b 二	一四a 四	老子云
三(五)	一五b 四	一四a 六	老子云
二(三)	二b 四	二b 一	河上公注曰
三(五)	一〇a 七	九b 一	河上公注云
三(五)	一五b 一	一四a 一	河上公注云
三(五)	一五b 二	一四a 五	河上公注云
三(五)	一五b 三	一四a 六	河上公注云
三(五)	一b 一	一a 一	玄宗皇帝云
一(一)	一六b 二	一六b 六	賈大隱疏曰
二(三)	一b 二	一a 九	賈大隱云
二(三)	二b 四	二b 一	賈大隱云
二(三)	二b 五	二b 二	賈大隱云
二(三)	七b 七	六a 二	賈大隱云
二(三)	九a 二	七a 二	老子述義云
三(五)	一〇b 一	九b 二	述義云
三(五)	一〇b 一	九b 三	述義云
三(五)	一〇b 二	九b 四	述義云
二(三)	三a 一	九b 九	老子義例云
一(二)	二六b 一	二五b 二	嚴子云

老子 玄宗注
老子述義⁴⁹

老子義例⁵⁰
莊子

莊子 郭象注

莊子講疏⁵¹
莊子疏⁵²

二(三)	一a 三	一a 三	莊子云
二(三)	八a 三	六a 五	莊子云
二(四)	一四b 四	三a 六	莊子云
二(四)	一六b 二	一五b 一	嚴子云
三(五)	八a 五	七b 一	莊子云
三(五)	八b 一	七b 五	莊子云
三(五)	三a 五	二a 四	外篇云
四(〇)		二五b 一	莊子云
四(〇)		二五b 九	莊子曰
一(一)	一六b 五	一五a 四	注云
一(一)	一六b 六		文選本
一(二)		三b 九	郭象莊子注云
二(三)	一a 五	一a 六	注云
二(三)	八a 六	六b 一	注云
三(五)	八a 五	七b 一	注云
三(五)	三b 三	二b 一	注云
四(七)		二b 五	郭象云
四(〇)		一四b 八	注云
一(二)	三b 七	三a 三	周弘正嚴子講疏云
一(二)	一六b 六		成英云
一(二)	三b 七	三a 二	成英云
一(二)		三b 三	成英云
三(五)			成英云

三(五)	三b二	三a五	巖子成英疏云
三(五)	三b四	二b二	"
三(五)	三b二	二a九	"
三(五)	三b一	二a七	"
三(五)	三a七	二a六	疏云
三(五)	三a六	二a五	成英疏云
二(四)	三a六	一b四	"
二(四)	三a五	一b二	"
二(四)	三a三	一a九	"
二(四)	三a二	一a八	"
二(四)	三a一	一a七	"
二(四)	一b三	一五b二	"
二(四)	一a七	一五a七	"
二(四)	四b五	三a七	"
二(三)	三b二	二a八	"
二(三)	二b三	二a八	"
二(三)	二b一	二a七	"
二(三)	二a七	二a五	"
二(三)	二a六	二a四	"
二(三)	二a五	二a三	成英云
一(二)	一a六	一a七	成英疏云
		三b八	"

楚辭 王逸注 四(九) 三(六) 七b七 六a七 楚辭云
 楚辭 王逸注 四(九) 二a三 王逸楚詞注云

神仙傳 十異九迷 二(三) 九a六 七a八 外一異曰(李仲卿十異九迷) 三a九 神仙傳云

抱朴子 一(序) 二b六 二b三 抱朴子曰 二(四) 七b四 四b五 抱朴子內篇云 二(四) 三a三 一a七 抱朴子內篇 三(五) 三b六 三b四 抱朴子云 三(五) 一a一 一b二 抱朴子內篇云 四(八) 二b四 " 四(八) 七a六 抱朴子云

列仙傳 一(一) 一a七 四b七 案列仙傳 四(三) 三a七 列仙傳云

文選鈔⁶³

一(序) 二a 一 b 六 文選鈔云

鄭玄

一(二) 二a 四 三 b 九 鄭玄云

京房

三(五) 一〇b 六 九b 八 京房云

曹憲⁶⁴

一(二) 二a 三 二五a 六 曹憲云

顏師固⁶⁵

二(三) 三a 七 一〇a 六

道士

一(二) 二九a 三 二六a 四 道士曰云

譙周⁶⁶

一(二) 三〇b 九 譙周云

弘決外典鈔引書注

(1) 尚書馬氏伝

尚書の馬融の注は、隋書經籍志、旧唐書經籍志に注と、新唐書芸文志に伝とあるが、日本国見

在書目録にみえない。清の馬国翰輯の玉函山房輯佚書の尚書馬氏伝卷二は、この条と同文を史記卷二夏本紀の裴駰の集解から引いている。

(2) 礼記王肅注

「王肅曰、…」とある前の一条は礼記注と確認できないが、礼記卷九礼運篇の經文に、ほぼ同文

がある。

(3) 三礼図

隋志に「九卷鄭玄及後漢侍中阮誥等撰」と、旧唐志と新唐志に「十二卷夏侯伏朗撰」とあるが、見在書

目にみえない。清の馬国翰(玉函山房輯佚書)王謨(漢魏遺書鈔)黄奭(漢学堂叢書)らが佚文を輯めているが、この条は含まれていない。

(4) 三礼義宗

梁の崔靈恩の撰で、三十卷(隋・兩唐志、梁書卷四八儒林崔靈恩伝は四七卷)。おなじく王謨、馬国翰、

黄奭らが、礼記正義、通典などの諸書から佚文を輯めていて、太平御覽卷二十四、二十六からとった礼記月礼の篇の一部に、わずかにこれと一致するものがある。三礼義宗は、五行大義の卷一、卷四にかなり纏まって引かれているが、この弘決外典鈔の末六条が、断片ながらそれと一致する。

(5) 春秋元命苞 「春秋緯宋均注」が、隋志に三十卷、兩唐志に三十八卷、見在書目に四十卷などとある。この書の佚文は、緯書集成卷四上 安居香山 中村璋八 篇 (漢魏文化研究会 昭和三八年) に集成されているが、所引の一条も収録されている。

(6) 孝経述義 隋の劉炫撰、五卷。卷一と卷四の室町時代の写本が舟橋家に伝えられ(京都大学蔵)、そのほかの三卷についても、林秀一博士がほぼ復元された 孝経述義復原 (林先生学位論文出版) に関する研究 (記念会・昭和二八年)。弘決外典鈔所引の六条は、すべて卷四から引かれたもので、五刊章と広要道章とにある。

(7) 論語馬融注 二条ともに「馬融曰(云)」とあるので別に掲げたが、いずれも何晏集解に収められる(学而、里仁篇)。馬融注本は、すでに隋志にみえず、見在書目にもない。

(8) 論語鄭玄注 鄭玄注の論語は、隋志、兩唐志にみえ、わが国にも将来された(見在書目)が、そのご失なわれた。この一条は、何晏集解にある(衛靈公篇)。

(9) 論語義疏 梁皇侃撰、十卷。衛靈公、季氏、雍也、陽貨、微子、述而篇からの六条の引用がある。これらを懷徳堂本の論語義疏と較べると、字句にわずかな差異がみられるほかに、ときに刪節の箇所があり、このことは、武内博士が、陽貨篇の鑽燧のところ指摘されている 武内義雄校・論語義疏校勘記 (懷徳堂記念会) (大正一三年)。

(10) 爾雅注 李巡、郭璞、孫炎の注が引かれて、馬国翰らの輯本にみられない佚文も多く、それに注者不明の一条があり、さらに「舍人云」、「某氏云」というのが、爾雅の本文、あるいは郭璞の注文に続いている。見在書目に

は、郭璞（撰）、孫炎（孫氏注）、それに沈旋の集注十卷があるだけであるが、沈旋集注は外典目にも注記されている。別に音義を引く一条があるが、兩唐志にみえる郭璞（一卷）、曹憲（二卷）の爾雅音義か、見在書目のいう爾雅音か、いずれの書がこれに該当するのかわからない。なお、孫炎注のなかの一条に、金沢文庫蔵本に「孫愔云」とあり、宝永刊本が「孫炎云」とするのがあって、釈獸の猶、または麀の項に附された、おそらくは孫炎注と思われるが、確認できないまま、孫愔の切韻のところにも掲げておいた。

⑪ 玉篇 陳の顧野王の三十卷（陳書卷三〇顧野王伝、兩唐志）、または三十一卷（隋志、現在書目、外典目）のいわゆる原本玉篇であろう。この佚文五条は、すべて現存の古鈔本（卷八、九、一八、一九、二二、二四、二七）のなかにはないが、岡井慎吾博士の玉篇佚文内篇玉篇の研究 所収（東洋文庫論叢一九）に、その本文（止觀輔行弘決所引）の佚文とともに収録されている。

⑫ 切韻 「切韻」、あるいは「唐韻」の名を示さないが、釈弘演（弘演寺釈、某弘演寺釈氏、釈氏）、孫愔（孫愔）、長孫訥言（長孫訥言）、祝尚丘（祝尚）、郭知玄（郭知玄、郭玄）、韓知十（韓知十）の書を引いている。唐代の切韻は、ほとんど散佚したが、平安時代の諸書にしばしば引かれてい、敦煌で唐鈔本の断簡が発見されたところから、多くの論考を生んだ。弘演の十卷、他の各五卷が見在書目にみえ、いずれも入東宮切韻十三家に属することは、周知のとおりである。

⑬ 啓蒙注 隋志と見在書目に、「啓蒙記三卷晉散騎常侍顧愷之撰」、がある。玉函山房輯佚書に、「北堂書鈔、初学記、太平御覽などからわずかに八条が集められているが、「啓蒙記並注」、のようにあって、啓蒙記の書名が正しい。この一条は、右の八条のうちの三国魏志卷三明帝紀の裴松之注からとった一条とまったく同文であるが、宝永刊本の文には誤りがある。

(14) 史記音義 宋の徐広(字は野民)に十二卷(隋志) または十三卷(兩唐志)が、唐の劉伯莊に二十卷(新唐志)があり、梁の鄒誕生の史記音三卷(隋志、新唐志)を旧唐志は史記音義としている。わが国へは劉伯莊と鄒誕生の著書もたらされた(見在書目)が、この佚文一条がそのいずれのものか知るよしもない。

(15) 漢書音義 漢書音義、あるいは漢書音は、韋昭、孟康らによって幾種か編纂された。見在書目には、音義で隋の蕭該の十二卷、撰者不明の三卷、顔師古の十三卷、音で隋の包愷の十二卷がみえるが、輯本は、清の臧庸に蕭該のものがある(拜經堂叢書など)だけで、この三条の拠った書が推しはかれない。顔師古の音義は他の書目にみられないもので、引書不明で顔師古の項に掲げた鷓鴣についての一条は、あるいはこの書からとられたのであろうか。

(16) 如涼漢書音義 金沢文庫蔵本が欠け、宝永刊本に、「如涼漢書音義云」とある。如淳の誤りであろう。如淳の伝は正史になく、その著書も芸文志にあらわれないし、見在書目にもみえない。しかし、如淳の漢書注は、文選の六臣注に百数十条あり、一切経音義や敦煌発見の唐鈔本修文殿御覽などの注にも引かれている。この漢書音義もそれと同書であろうか。

(17) 梁典 隋志、兩唐志とも、劉璠と何之元の各三十卷の二書をあげている。このうち、見在書目には後者だけがみえる。この一条は、梁の元帝について記すが、原書の記事を相当に要約したものであろう。

(18) 高祖実録 唐の高祖実録で、二十卷、旧唐志には房玄齡の撰と、新唐史には敬播の撰、そして「房玄齡監修、許敬宗刪改」とある。許敬宗が、これと、おなじく房玄齡監修、敬播撰の太宗実録とを、おのれの愛憎によって事を曲げて改刪した事情については、その伝に詳しい(旧唐書卷八二・新唐書卷二二三上)。房玄齡は太宗の貞観中に死ん

だが、許敬宗は、つづいて高宗実録三十巻の編纂にもその主張を通した。見在書目にみえる「唐実録九十巻司空梁国公房玄齡等撰」と「くくくくくくくく中書令許敬宗撰」とは、両唐志にも二人の伝にもみえず、これら諸実録の集成で、この一条もそのいずれかによっているのであろうか。しかし、これも高祖についての記事をまとめたもので、一条の忠実な引用ではあるまい。

(19) 周書異記 卷数、撰者、成立などいっさい不明。周の昭王二十四年に、兆候があつて仏陀の誕生を告げ、穆王五十一年に、おなじく涅槃を知らせたという記事で、後漢の明帝や摩騰法師の名もみえる。

(20) 春秋後語注 春秋後語は十巻、晋の孔衍の撰、唐の盧蔵用の注。見在書目はともに十巻の孔衍記麴本と盧蔵用注本とを別に掲げ、弘決外典鈔の金沢文庫蔵本の書目には、「孔衍記范陽盧蔵用注十巻」とある。「孔衍記」の右に、「十巻イ本シカ」との書入れがある。わが国へきたのは、それぞれの単行本であろう。宋代以後散佚し、王謨、黄奭（漢学堂叢書）の、あるいは説郛に輯本があるほか、敦煌で巻五ノ八の四巻が発見されている（鳴沙石室遺書）。ここでは、扁鵲について、本文に「越医也」とあるのに、わずかな注を加えているだけである。

(21) 帝王世紀 晋の皇甫謐撰、十巻（見在書目は三〇巻）。隋志、見在書目とも、「起三国尽漢魏」と、その内容を説明する。王謨（漢唐地理書鈔）、顧觀光（指海、叢書集成）、宋翔鳳（訓纂堂叢書）らの輯本があるが、ここに引く二条は、炎帝と堯、舜についてのもので、史記正義、北堂書鈔、芸文類聚、初学記、太平御覧などから輯められたものと一致するところもある。

(22) 年代曆(略) 「帝王年代略十巻積靈実撰」と見在書目にあるものである。両唐志などにはみえない。弘決外典鈔巻頭の年代略記が、「右弘決所引国号、為明真偽前後、依靈実年代曆略、記之」として長く引用しているのは、

ことに貴重で、当時、この書が手頃な年代記として利用されたであろうことを窺わせるものがある。

(23) 帝系譜 兩唐志に張愔等撰の二巻本がみえるのが、これであろう。所引文一条はあまりに短く、その内容を推測すべくもない。

(24) 開元令 見在書目によると、隋の大業令、唐永徽令、そして唐開元令三十巻が将来されているが、ここにも参照されたように、開元令がよく利用されたのであろう。その開元令は、三年、七年、二十五年の三たび刪定され、開元七年令は、三十巻二十七篇、千五百四十六條からなるものであった仁井田陞(東方文化学院東京)唐令拾遺(研究所・昭和八年)。所掲の二條は、その官品令第一、賦役令第二十三を参照したものである。

(25) 孝子伝 止觀輔行伝弘決から引かれた本文は、「孝伝」と「蕭堯濟孝子伝」と二つの孝子伝を引いて、三州人と五郡人の話題をとりあげている。蕭堯濟、隋志に、晉輔国將軍蕭広濟、とあり、正史に伝はない。蕭広濟の孝子伝は、ちようどこの箇所が太平御覽の巻六十一と巻三百九十六とにあつて清苧泮林編(十種古逸)古孝子伝(書所収)、語句にかなりの相違があるが、ここではとりあげない。弘決外典鈔の引書は、ただ「孝子伝」とあつて、三州人と丁蘭の話とであるが、蕭広濟の孝子伝、あるいは撰者不明の京都大学蔵天正八年清原枝賢鈔本とは、まったく文体が違う。なお、隋志、兩唐志に、孝子伝は、蕭広濟のほかにも鄭緝之、師覺授、宋躬、王韶之、盧盤佐、徐広などと多いが、見在書目には、宋の鄭緝之の十巻本が、「孝子伝讚」としてみえるだけである。

(26) 輿地志 輿地志三十巻、陳の顧野王之撰(隋志、兩唐志、見在書目)、宋代にはすでに亡んだらしい。この鄭弘風の一条は、王謨の輯本漢魏漢唐地理遺書鈔(書鈔所収)にみえない。

(27) 坤元録 見在書目に魏王泰撰の百巻があり、正史では宋史芸文志にはじめて著録される。引用の四條のうち

三条までは、仏寺に関する記事である。

(28) 臣軌注 則天武後の臣軌二巻の注で、その注者は明らかでないが、引用の八条はすべて上巻の公正章にあり、成實堂文庫蔵の寛文八年刊の狩谷掖斎の手校本(民友社影印 大正四年)には、本条が校勘に用いられている。

(29) 相鶴経 隋志は、梁にあった二巻が亡んだとし、見在書目にもみえないが、両唐志には、浮丘公撰の一巻が録されている。この一条は、「鶴千六百歳、形定」という短いもので、説郛に収録の王安石が嵩山の石室でえたという佚文のなかに含まれる。

(30) 大素経 黄帝内経太素三十巻、唐楊上善注。仁和寺に五巻を欠く仁安元(三年)一(一六六)八の写本があり、石原明氏の論考に詳説されている。内経の真本国宝黄帝内経太素(漢方の臨床・三一九)。「楊上善云」とあるもののうちには、太素経の注であることが明らかなものもあるが、すべてが確認できたわけではないので、「注」とあるものと別に掲げた。またこのなかに、明堂経の注も含まれているかと思われるが、わたくしにはその判別がつかない。

(31) 明堂経 黄帝内経明堂十三巻、おなじく楊上善注。永仁四年(一二九六)、永徳三年(一二三二)書写の巻一だけが、仁和寺に残っている。

(32) 八十一難 黄帝八十一難経。隋志、新唐志は二巻、旧唐志は一卷、見在書目は九巻とし、秦越人の撰と伝えられ、呉の呂広や唐の楊玄操らが注している。現行の江戸時代の刊本は、五巻で、宋の王唯一の再編にかかるが、所引の本文、呂広の注、楊玄操の序注をほぼ含んでいる。

(33) 脈経要決 各志にこの書名はない。王叔和の脈経十巻(隋志、新唐志)、黄帝脈経決十二巻(見在書目)のほか、徐氏新撰の脈経決二巻(隋志、両唐志は、脈経訣三巻徐氏撰)があるが、別書であろう。

(34) 本草 外典目に「神農本草經三卷」、「新修本草二十卷孔志約撰」とあるように、この二十条ほどは、両書から引かれているのであろう。いま、孫星衍らの神農本草經の輯本によっても、その判別ができないので、一括して掲げざるをえなかった。梁の陶弘景の注は神農本草經へのもので、これを加えて本草集注七卷となり(兩唐志・見在書目)となり、開元六年写のその序録一卷が、敦煌で見つかっている(吉石齋叢書初集所収)。新修本草二十卷、目録一卷、藥図二十卷、図經七卷(新唐志)は、顯慶四年(六五九)、勅撰されたもので、蘇敬はその編纂の中心である。仁和寺に鎌倉時代の鈔本など十卷が残されている。

(35) 本草拾遺 新唐志に「陳藏器本草拾遺十卷開元中人」がある。李時珍の本草綱目は、卷一序例の歴代諸家本草に、宋の質禹錫の言(嘉祐補註本草)を引いて、陶弘景、蘇敬の書の遺逸を補ったもので、序例一卷、拾遺六卷、解紛三卷からなり、総じて本草拾遺十卷という、と説明し、本文にもしきりに引用しているが、石膏の項にこの文はない。

(36) 葛氏方 見在書目に、「葛氏肘後方十」、「くくくくく三陶弘景撰」、「葛氏百方九」のほか、「葛氏方九」卷がある。この糞汁の一条は、通行の八卷本の肘後備急方(道藏など所収)にもみえない。

(37) 通玄 見在書目には、「通玄十」と「通玄方十」とがあり、宋志に「支観通玄方十卷」がある。

(38) 養性要集 隋志、兩唐志に張湛撰の十卷があり、見在書目にみえない。

(39) 尹氏黄帝經注 腎についての一条で、医書ではあろうが、黄帝經についても尹氏についても、いつさいがわからない。この四書は、医籍考にも説明されていない。

(40) 孫氏瑞応図 隋志に、注記して「梁有孫柔之瑞応図記、孫氏瑞応図讚各三卷、亡」とあり、旧唐志は「瑞応図記二

卷孫柔之撰」、新唐志は「孫柔之瑞応記三卷」とする。見在書目には、「瑞応図十」とあるだけで、撰者の名を書かない。輯本は、馬国翰（玉函山房輯佚書）、葉德輝（觀古堂所著書）らのものがあって、この三条は、すべて類書から収録されている（亀・芸文類聚卷九九、白鹿・初学記二九など、鸞鳥・芸文類聚卷九九など）。このうち、亀の類の「亀三千歳、在藁著之下」が、芸文類聚では、「亀……三千歳、尚在著藁之下」とある。

〔41〕 五行大義 五卷、隋蕭吉撰。穂久邇文庫蔵（久邇家旧蔵）の元弘相伝本の系統に、一色時棟の元禄刊本、林述斎の佚存叢書本などの諸版本があり、これと系統を異にして、高野山三宝院（靈宝館現蔵）の鎌倉写本（卷五のみ・宝治二年朱点）と天理図書館蔵の天文九、十年卜部兼右写本（藍本正嘉二年鈔本）がある。中村璋八・「五行」ピア（七・昭和三年）弘決外典鈔所引のうちに、卷一の第二論支干名と卷五の第二十一論五帝のところの比較的長い引用があるので、試みにつきに掲げて、両系統本と較べてみるが、節略の箇所がめだつ。対校本は、元弘相伝本系の神宮文庫蔵の摹写本、それに高野山本の影印本（高木利太（昭和七年））である。

神宮文庫本（神）

卷五の残卷なので、卷一の前条は対校していない。

高野山本（高）

宝治二年朱点に際して、文字を訂した箇所がある。（朱）として添記する。

卷一・第二論支干名

支干¹、因五行而立²。作甲乙以名日、謂之干⁴、作子丑以名月、謂之支⁵。干字有三種不同、一作幹、二作斡、三作干字。斡字⁸者、支幹⁹、相配成用、如樹木之有枝条茎斡、共為樹體、故云支幹。幹者濟幹為義、支者支任為義、此日辰、任濟、万事、故云支幹。又作干字者、此与斡義、同如物在竿上、能豎立頭然、故云干。世從易、故多云干也。

（神） 1・「干」の下「者」字あり。 2・「立」の下「之」字あり。 3・三二字略。 4・6「干」字ともに「幹」に作る。 5・四二字略。 7・「字」の下「乃」字あり。 8・「斡」の上「今解」の二字あり。 9・「支幹」を「此支斡」

に作る。 10・「相」の上「既」字あり。 11・「故」を「所以」に作る。 12・「支」字なし。 13・「幹」の上「又作」の二字あり。 14・「濟幹」を「幹濟」に作る。 15・「此」の上「以」字あり。 16・「此」を「是」に作り、その上に「亦」字あり。 17・「同」字なし。 18・「干」を「竿」に作り、その下に「也」字あり。 19・「世」の下「書」字あり。 20・「云」字なし。

卷五・第二十一論五帝

遂古已来、所論五帝、凡有三種。河凶云、東方青帝、靈威仰、木帝也。南方赤帝、赤熛怒、火帝也。中央黄帝、含枢紐、土帝也。西方白帝、白昭矩、金帝也。北方黒帝、叶光紀、水帝也。⁶ 此五帝、並天上神、下治於世。⁷ 其精為五帝産五星。⁸ 礼記云、春之月、其帝太皞、夏炎帝、中央黄帝、秋少皞、冬顓頊。¹⁰ 又諸史、以少昊・顓頊・高辛・唐虞、謂之五帝。此蓋自舜以前、五行相承為帝也。

1・(高)「炎」に作り、(朱)「赤」に訂す。 2・(高)「努」に作り、(朱)「怒」に訂す。 3・(高)「紐」を「細」に作る。 4・「土帝也」もと金沢文庫本になく、円種が書入れて補う。 5・「白昭矩」(神)「白招拒」に、(高)「白招矩」に作り、(朱)「拒」に訂す。 6・二四字略。 7・一二字略。 8・(高)「其精為五帝之座。五星…」に作り、「五星」の下二四字略。 9・(神)(高)「云」を「曰」に作る。 10・(神)(高)「夏炎帝…冬顓頊」を「夏之月、其帝炎帝、中央土、其帝黄帝、秋之月、其帝少皞、冬之月、其帝顓頊」に作る。 11・一〇七字略。

(42) 子抄 金沢文庫蔵本には二条とも「子抄云」と、宝永刊本は前条が欠けて、一条だけ「子鈔云」とある。隋志(子抄) 兩唐志(子鈔)は、庾仲容と沈約の同名の二書を掲げているが、見在書目には、庾仲容の三十巻のものだけがみえる。

(43) 修文殿御覽 四条とも「御覽云」とあるが巻頭の書目に「修文殿御覽三百六十卷祖孝徵等撰」とあり、別に巻二に「御覽三百六十卷、有乾坤万物部、北齊尚書左僕射祖孝徵等所撰也」という注があり、さらにこの四条がかならずしも大平御覽のものとは一致しないので、修文殿御覽であることに疑いない。また、弘決外典鈔の成立は、太

平御覽成立後十年で、宋がその書の輸出を厳禁していたことでもある。小島小五郎(公家文化の研究)。修文殿御覽の佚文は、ほかに明文抄などに数条が知られるにすぎない。ペリオ発見の敦煌本は、なお修文殿御覽と断定しがたいが、鳥部の鶴、鴻、黄鵠、雉の項を記載しているの、その続きがもうすこしあれば、弘決外典鈔にある鶴鵠の条との一致がみられたかもしれない。

(44) 漢法本内伝 五卷、撰者不明、各志に著録されない。梁の天監中以後の作といわれ、広弘明集、集古今仏道論衡、法苑珠林などに引かれている。二教論(二卷、北周道安撰)、古今仏道論衡(八卷、唐法琳撰。見在書目は一二卷)、弁正論とともに、道教の論難に用いられている。弁正論の一篇に、道宜の十喻九箴が収められている。

(45) (智者大師) 本伝 すべて「本伝云」とある。灌頂の「隋天台智者大師別伝」よりも「続高僧伝」巻十七の伝に近いが、それでもなお異同があつて、別書かと思われる。

(46) 冥報記 宝永刊本には「吏部尚書虎臨冥報記云」とあるが、金沢文庫蔵本、文選紙背本には、正しく「吏部尚書唐臨冥報記云」とある。

(47) 靈応伝 各志ともこの書を収録せず、見在書目にもみえない。所引の三条は仏教に関する記事で、竜威秘書や唐代叢書などに収められる唐闕名者撰の靈応伝との関係も、考えにくい。

(48) 兼名苑 唐の積遠年撰。旧唐志は子部名家類に十巻と、新唐志はおなじく二十巻と、そして見在書目は、十巻、今案三十巻、とする。

(49) 老子述義 十巻、賈大隱撰(両唐志、見在書目)、従来、老子述義の佚文はこの九条(六条)しか知られなかつたが、最近さらに金沢文庫蔵の周易注疏其他雜抄などから新たな佚文が紹介されている。阿部隆一・金沢文庫蔵鎌倉鈔本周易注疏其他雜抄と老

子述義(田山方南先生華甲記念)の佚文(論文集・昭和三八年)

(50) 老子義例 引用はわずかに一条(五八字)。各志、見在書目にこの書名をみず、巻数、撰者などがわからない。
(51) 莊子講疏 八巻、陳の周弘正撰(隋志、見在書目)。周弘正は、周易、論語、老子、孝経の(講)疏も著わしたことが、その伝にみえる(陳書卷二四)。

(52) 莊子疏 唐の成玄英撰。新唐志にその略伝が注記されているが、弘決外典鈔や見在書目にみられるように、「成英」とも呼ばれたのであろう。巻数は、見在書目が十巻、旧唐志が十二巻、新唐志が「注莊子二十巻、疏十二巻」とし、現存の南華真經注疏には、十巻の宋刊本(静嘉堂藏残五巻)、三十三巻の室町時代写本、四十五巻の道藏本などがある。古鈔本としては、大東急記念文庫に、金沢文庫旧藏の鎌倉写本零巻がある。

(53) 文選鈔 見在書目に、公孫羅撰の六十九巻と撰者不明の三十巻の二書があげられていて、前者については、両唐志に公孫羅注の六十巻とあり、ときに、文選集注に引かれている。所引の一条は、卷三十六の傅季友の「為宋公修張良廟教」一首のうちの「大極横流」への注かと思われる。

(54) 曹憲 隋の曹憲は、文選の注者として著名であり、広雅の音注など著書も多い。この一条は、広雅卷七の注かと思われるが、臆測にすぎない。

(55) 顔師固 鷓鴣の短い説明であるが、漢書注にみえず、あるいは見在書目にみえる漢書音義であるかもしれない。

(56) 譙周 三国志蜀志卷十二の譙周伝に、およそ著述するところ百余篇といううち、見在書目にみえるのは、古史考二十五巻だけである。所引の一条は、周公についてのごく短い記事である。